



ムンバイの住宅事情

ANAムンバイ支店 権八重 万耶

ムンバイ入りして1カ月半、ようやくアパートに入居することができました。

ムンバイの住宅事情の悪さはおそらくインド一番で、インドの物価を考えるととにかく家賃が高く、近年の不動産高騰は異常です。しかも、私のように独身、女性、外国人と三拍子そろえばアパートのソサイアティーに入居を拒否されることが多々で、アパート探しは困難を極めます。ちなみにこの「ソサイアティー (Society)」という言葉ですがインドでは多用されており、その定義はかなり広範囲です。大まかに説明すると、宗教、カースト、出身などによってグループ分けされた人々の集団を指します。同じアパート内に住む人々の集まりもソサイアティーといいます。そして、例えば、ジャイナ教信者のみ、イスラム教信者のみ、ベジタリアンのみ、のように多くのアパートが、程度の差はあれ、排他的な特徴をもっています。

インドでは、多くの人は結婚するまで親元で暮らし、結婚してからも自分の両親や配偶者の両親と暮らすことがほとんどです。ある程度の年齢に達したら一人暮らしをするという選択肢が世間に浸透していなければ、それを許す物理的な環境も整っていません。2007年12月の米経済誌フォーブスでの発表によると、ムンバイの1平方キロあたりの人口は2万9650人（同時期の東京



23区は1万3886人/平方キロ)で人口密度は世界一です。飽和状態のこの都市では、家族も手狭なアパートに住まざるを得ません。その距離間ゆえ、家族との結びつきが特に強くなるのも自然なことかもしれません。そして、この「家族」こそが、最小のソサイアティー単位になります。インド人は自己紹介をする時に必ずと言っていいほど家族のことに触れます。自分がどんな人間かというよりは、自分の父親が〇△会社に勤めているだとか、兄弟がアメリカの〇×大学出身だとか自分の入っている「器」にこだわる傾向が強いような気がします。つまり、「ソサイアティー」をよく気にします。これは、初対面の相手に対しても同じで、相手の職業について業界や業種よりも勤めている会社の具体的な名前や肩書きの方が気になるのです。私はアパートへの入居を許可してもらうために、毎週日曜の昼に行われるソサイアティー会議に出向き、5人の委員からいろいろな質問(尋問?)を受けました。なぜなら、ほとんどのソサイアティーが、一人暮らしの独身者は風紀を乱すというトンでもなく偏った見方しかしないからです。勤め先、業務内容、勤務時間、配偶者の有無、交友関係、訪問者の数と頻度などなどプライベートなことまで追求され、しまいには、「私はアパートをゲストハウスとして使いません。」という誓約書にサインをさせられました。ちなみに、家族や親戚はアパートに滞在可能ということで、インドにいる間は親戚が増えそうです(笑)。

